

秋季大会発表要旨

特集

アダプトされた文学の可能性

——平準化する人文知の受容現象を問う——

【特集の趣旨】

運営委員会

文学が内包する通俗性に対し、アカデミックスな文学研究が本格的、かつ広い視野に立脚して応える動きを顕著に見せ始めるのは、一九九〇年代末である。日本近代文学会でも、九八年の六月例会で「(通俗)の逆襲」という企画が組まれ、二〇一〇年一月には、「日本近代文学」誌上に、通俗小説についての研究展望が掲載された。

こうした動きは、従来の(純文学/大衆文学)という二項対立枠から解放された視座で「文学の俗性」を語ることを可能にした。例

えば菊池幽芳や徳富蘆花が代表する家庭小説、菊池寛が牽引した通俗小説の流行、黒岩涙香から江戸川乱歩へと至る探偵小説の系譜などが、時代の感性を示す重要なテクストとして注目された。また、夏目漱石や泉鏡花、芥川龍之介、佐藤春夫などの作品との同時代的親和性を指摘されることによって、固定化した文学史観を再検討し直す契機を生んだ。

そして、平成も終わろうとする現在の文学場では、更なる認識転換が要求されつつある。日々早い速度で更新される情報社会の中では、あらゆる思想が平準化して伝播していく。特に人文学的教養は、今日のエンターテインメントにおいて、もつとも情報化されやすい要素である。例えば、歴史学の教養を取り込んだゲームの爆発的ヒットは、人文知がも

やインテリ層によって保護されるものではなく、一般層によって消費される情報要素として受容されていることを示している。

文学の領域では、実在した文豪が超能力者として闘う漫画『文豪ストレイドッグス』を下地とした『文豪ストレイドッグス公式国語便覧』、文豪を転生させ闘わせる育成シミュレーションゲーム『文豪とアルケミスト』に基づく『文豪とアルケミスト』文学全集』などが、こうした人文知の受容現象の好例と言えよう。さらに文学館の展示企画や文学教育の現場での活用を通して、その現象は拡がりつつある。

かつて「文学の俗性」という問題が孕んでいたクリティカルで反権威的なエネルギーとは異なる、テレビやSNSを介した水平的な人文知の受容現象は、文学がこれまで担ってきた役割の一つである啓蒙性の遙か上をいく影響力を今や有している。こうした現象をアダプテーションと捉えるなら、文学および文学研究はそれに対してどのように向き合うことが可能であるか。新たな「文学の俗性」論を試みたい。

文豪・森鷗外、電話に出ない！

——「文豪」言説における作家の消費と
「文学の俗性」——

大橋 崇 行

今、「文豪」ブームが起きている。しばしば指摘される朝霧カフカのマンガ『文豪ストレイドッグス』やゲーム『文豪とアルケミスト』のほかにも、ポップカルチャーの領域では次々と「文豪」を描いた作品が発表されており、今後もさらなる広がりを予見させる。

特に『文豪とアルケミスト』は、金沢市の泉鏡花記念館などをはじめ全国各地の文学館と提携したイベントを展開しているほか、その主要なユーザーである女性たちがキャラクター化される以前の「文豪」が書いたものもとの文学テキストにまで手を伸ばすなど、文学の受容のあり方という点でも注目がなされている。

しかし、近代以降に定着した「文豪」言説に目を向けてみると、現在語られているような「文豪」のキャラクター化は、けつして特

異な現象ではないことがわかる。むしろ「文豪」言説においては、作家を権威化する一方で、普段は文学作品を読まない読者に対して作家のある種のキャラクターとして消費させ、文学と位置づけられるテキストを他の娯楽作品と平準化して受容させていこうとする方向性を含んでいたのではなかったか。

さらに「文豪」言説は、そのように位置づけられる作家たちが所属する「文壇」や、そこでのホモソーシャルの形成とも無関係ではなく、そうした側面は少なからず文豪のキャラクター化に反映されている。その意味で現在の「文豪」ブームは、「文豪」という概念がもともと内在していた問題を、私たちの眼前に示したものとしての側面を少なからず持つていると考えられる。

以上のような問題意識から、本発表では明治期以降、「文豪」という概念がどのように普及し、編成されたのかについて考えていきたい。その上で、作家が「文豪」と位置づけられることが、文学テキストの受容とどのような関係を持つのか、そこで生じる「文学の俗性」とはどのようなものかについて検討を行っていく。

文学の演劇化とキャラクター生成

——変装／変奏する《黒蜥蜴》——

有 元 伸 子

一つのコンテンツを複数の媒体で展開するメディアミックス。演劇界では、近年、漫画・アニメ・ゲームを原作とする「2・5次元ミュージカル」が人気を博している。俳優たちは原作のキャラクターのビジュアルそっくりに扮して、読者＝観客が抱く原作（2次元）のキャラクターのイメージを壊すことなく現実の舞台（3次元）に再現することが尊重される。

キャラクター／キャラは、サブカルチャーのみならず現代文化・社会を考察する重要な問題系である。2・5次元演劇では原作のキャラクターの再現を最優先するが、それは異なる文学の演劇化＝アダプテーションとはどのようなものだろうか。《俳優と観客が身体（ライブ）的に共在》し、《上演で加することは、世界の再魔術化、および上演に参加する人々の変容である》（エリカ・フィッ

シャーリヒテ」とされる演劇と、文学の往還の様相を探ってみた。

本発表で扱う「黒蜥蜴」は、妖艶な女賊・黒蜥蜴と名探偵・明智小五郎とのスリリングな対決と恋を描く江戸川乱歩の長篇探偵小説（一九三四年）だが、この作品が一躍知られるのは三島由紀夫による戯曲化（一九六二年）以降である。現在までキャストを替えて繰返し上演され、映画化・ドラマ化・マンガ化などもあいまって人気演目となった。周知のように、美輪（丸山）明宏の代表作だが、美輪のイメージを脱色する公演や、三島を介さず乱歩の原作から直接にアダプトした舞台、宝塚歌劇や新派など上演の振幅も広がり、ここ数年は、毎年複数の劇団やプロジェクトによつて上演される活況を呈している。

翻案の連鎖ともいえる「黒蜥蜴」舞台の複数のバージョンは、まさに《差異を伴った反復》（リンダ・ハッチオン）を示す。名探偵と女賊の対決と恋という主筋は守られつつも、タイトル・ロールの黒蜥蜴は、ときに乱歩原作とも三島版とも異なったキャラクターが生成され、その過去すらも創作される。もはやオリジナルと翻案の優劣は無化され、競

演による反復とずらしにより、観客はたえない（黒蜥蜴）の生成＝増殖に立ち会うことになるのである。

寺山修司「人魚姫」の位相空間を 探求する

中 沢 弥

寺山修司の「人魚姫」（一九六七年）は、人形劇のためのシナリオである。上演した「劇団人形の家」という名称も寺山が名付けたという。いうまでもなくアンデルセンの「人魚姫」に基づいているが、シナリオの依頼を受けた当初寺山自身その存在すら知らなかったという。寺山の「人魚姫」は、アンデルセンの物語をなぞりつつ、人魚はマルドロールと名付けられ、王子は船長に置き換えられる。

結末もオリジナルとは異なる展開を見せる。オリジナルを換骨奪胎して自らのテキストを作り上げるのは、寺山修司の常套手段である。「人魚姫」は、人間と人魚が愛し合うという一種の異類婚の物語である。しかも、寺山

版は、人形が演じるだけではなく、人形使いがセリフをしゃべり、客席の女の子（もちろんあらかじめセリフを吹き込まれた子役であるが）と会話する。舞台と客席が一体化し、人形と生身の俳優が同列に並ぶことで、境界がやぶられる。「人魚姫」は、境界性の物語である。

「人魚姫」が最初に活字になったのは、「フォアレディース」シリーズ（新書館）という女性向けシリーズの一冊であり、宇野重喜良の挿絵が本を飾った（宇野は「人魚姫」の人形のデザインも担当している）。人形劇が子どもの領域に置かれ、人形が女性のジェンダーに位置付けられるものとすれば、そうした囲い込みに対する寺山の挑戦である。

「人魚姫」のマルドロールは、船長を殺すことが出来ず、泡となって消えてしまう。マルドロールは、船長への愛を自らが消滅することで証明する。船長の命とマルドロールの愛は両立できない。「人魚姫」は、二律背反の哀しみを語っている。

《講演》

なぜゲームが教養の起点となり得るのか

今回の講演では『文豪とアルケミスト』の運用を通して得た知見から、このような現象の原因や意義についてお話したい。

【略歴】

谷口晃平（たにぐち・こうへい）

合同会社 D M M G A M E S 『文豪とアルケミスト』プロデューサー

谷 口 晃 平

ゲーム『文豪とアルケミスト』を取り巻く様々な事象から、現代における教養や文化の広がり方を読み解く。

（ 7 ）

『文豪とアルケミスト』を遊ぶ主流層は二〇代であるが、彼ら若者の消費行動は一昔前と比べて大きく変化している。昨今若者の活字離れが叫ばれているように、新聞や雑誌の売れ行きは年々低下の一途をたどっている。そうした中で、新たなメディアとしての地位を確立しつつあるのがゲームやアニメと言え。また、インターネットやSNSが発達した現代では、人と人との関係性がより重要視されるようになった。彼らが作品そのものではなく人物（キャラクター）により魅力を感じるのには、そのような背景も一因にあるだろう。

秋季大会研究発表

第一会場（101教室）

個人発表

芥川龍之介「手巾」論

—— 翻訳言語の援用 ——

木村素子

本発表では、長谷川謹造先生が西山夫人の行為を考える時に頭をよぎったストリンドベリの評論にある「型(マニール)」と「臭味(メツツヘン)」の問題について新しい知見を述べることを目的とする。

作品と同時代の辞書『新式獨和大辭典』(大正八年)によれば、「マニール」は同じ表現を繰り返す惰性を批判する言語であり、「メツツヘン」は、表現がそぐわず馬鹿げていることを批判する言語である。一方、日本語の

「型」は、表現の繰り返しに必ずしも批判的ではなく、表現が繰り返されることで出来上った、洗練された表現方法ともみなされる言語である。また、「臭味」とは誇張された嫌味な表現に対する批判の言語である。

長谷川先生は、西山夫人の手巾を握りしめる態度に、武士道に通う、心の動揺を表にあらわさない精神性を見た。長谷川先生は「マニール」「メツツヘン」というドイツ語の意味に反応したのではなく、「型」「臭味」という日本語(翻訳言語)の意味に反応したと考えられる。この部分がこれまでの研究では曖昧であったのでそれを正したい。

そもそも西山夫人が手巾を握る行為は、ストリンドベリの評論において誇張であるとの批判に相当する。西山夫人の態度を称賛した長谷川先生の価値観と、ストリンドベリの評論が示す西洋の価値観とは異質なのである。また、西山夫人の態度に見出された精神性を称賛した長谷川先生は、精神上の嘗為に価値を見出す人物として描かれ、西山夫人の態

度と岐阜提灯と西洋人の奥さんとを並べ、そこに西洋の要素と日本の要素との一致を認め「調和」のとれた状況に満足を示す。

そして、長谷川先生が岐阜提灯を凝視する行為には、西洋と東洋の異質性に直面した際の実在への信頼が表れており、精神的なものに価値を見出していた先生の考え方に反する行為である。

以上の考察から、小説「手巾」は、精神性と身体上に表れた行為との不一致という問題が批判的に描かれていると考えることができる。

谷崎潤一郎「呪はれた戯曲」考

—— (感応)の装置としての(ヒステリー) ——

村山麗

明治以降、日本では近代人に特有の《病》であるところの神経病が流行した。三大神経病として遍く知られていたのは《神経衰弱》・《ヒステリー》・《ヒポコンデリー》で、特に先の二つは多くの文学作品に幾度となく登場

し、重要な主題となつてきた。この問題を繰り返し描いた作家の一人に谷崎潤一郎がいる。谷崎は「The Affair of Two Watches」(明治四十三年十月)を皮切りに、「悪魔」(明治四十五年二月)、「統悪魔」(大正二年一月)、「恐怖」(同年一月)、「異端者の悲しみ」(大正六年七月)、「柳湯の事件」(大正七年十月)など、「神経衰弱」や「ヒステリー」を扱った作品を多く発表している。しかし、これらの作品に見られる神経病表象は、同時代評では「変態心理」という名の下に一絡げにされ、先行論では谷崎自身の神経衰弱の表れとしてしか見做されてこなかった。

「呪はれた戯曲」(大正八年五月)にも、「神経衰弱」的な強迫観念と「ヒステリー」が登場する。この二つの病は、主人公佐々木に大きな影響を与え、「神経衰弱」は彼の思考と行動の基調であり、「ヒステリー」は妻玉子を殺害する動機と直接的に結びついている点で、作品に通底する重要な要素となっている。また、作品には近代以降の自由恋愛の思想に基づいた夫婦制度の陥穽と破綻がひとつの主題として書き込まれているが、ここで佐々木と玉子の夫婦としての関係性を保証している

ものとして、「感応作用」が存在している。この夫婦の「感応作用」を引き起こす前提として、佐々木が「近代人に特有な、過度に鋭敏な、病的な神経」を有していること、また、玉子も、「涙」および「肉体」という身体性を帯びた《病》としての「ヒステリー」を起していること、が存在する。よって、本発表では、佐々木の「神経衰弱」と玉子の「ヒステリー」の《感応》を読み解くことで、恋愛から出発した夫婦関係と神経病というふたつの近代的な問題を追究することを試みる。

瀧口修造はどう書いたか

——一九二七—三二年の作品の方法について——

大川内 夏 樹

瀧口修造は、一九二七年から一九三一年にかけて、行分けのない、散文詩風の作品を集中的に発表している。この中には、「実験室における太陽氏への公開状」(『文学』一九二九年一月)・『LE SURREALISME

INTERNATIONAL』(一九三〇年一月)や「絶対への接吻」(『詩神』一九三一年一月)等、この時期の瀧口を代表する作品も含まれている。

これらの作品からは、アンドレ・ブルトンら、フランスのシュルレアリストが、いわゆる「自動記述」の方法を用いて執筆した作品群の影響下で書かれたもののような印象を受ける。実際この時期の瀧口は、「自筆年譜」(『本の手帖』一九六九年八月)の一九二七年の部分に「ブルトンとスーポの『磁場』ブルトンの「シュルレアリスム宣言」『失われた足跡』エリュアールの「レペティション」などを入力して徐々に影響を受ける」とあるように、ブルトンらの試みを積極的に吸収しようとしていた。しかし、大岡信との「往復書簡」(『現代詩手帖』一九六八年一月)において、瀧口は「あれはシュルレアリスムのオートマティスムに触発されたとはいえ、彼らのテクスト・シュルレアリストとは似てもつかぬ、私自身の独特な言語作業だった」と述べており、「自動記述」とは異なる方法によるものであることを強調している。

では、瀧口のいう「独特な言語作業」とは、

具体的には、いかなる方法に則つてなされてきたのだろうか。この点を明らかにするため、本発表では、一九三〇年前後の瀧口のフランス・シュルレアリスムの受容の状況を明らかにし、瀧口が具体的にブルトンらのどのような作品に触れていたのかを確認する。そして、それらの作品と、この時期の瀧口の散文詩風の作品とを比較しながら、瀧口のいう「独特な言語作業」が、いかなる方法によるものであったのかについて考えたい。

パネル発表

「私小説」をどのように考えるか？

——〈私小説性〉概念による再検討の試み

梅澤亜由美・大木 志門
河野 龍也・小林 洋介
尾形 大・小嶋 洋輔

本パネルは、作家が自身をモデルに創作したいいわゆる「私小説」について、研究上の新

たな考え方の枠組みを提示する試みである。そもそも「私小説」とはどのようなものであり、また「私小説」であるかどうかはどのように決定されるのであろう。様々に論じられてきたこの問題に、十全に回答し得た有効な視点はいまだ存在しないと云つてよい。

一九九〇年代以降の「私小説」研究の動向は、その实在性をめぐるものであった。すなわち「私小説」は「小説」の下位ジャンルとして実体的に存在しているのか否か、ということである。小林秀雄、中村光夫らの伝統的な私小説史観に対して、イルメラ・日地谷^{II}キルシュネライト『私小説—自己暴露の儀式』(一九九二)、鈴木登美『語られた自己—日本近代の私小説言説』(二〇〇〇)などで〈私小説〉定義の可能性／不可能性が問題とされて以降、日比嘉高『自己表象』の文学史—自分を書く小説の登場』(二〇〇二)、山口直孝『私』を語る小説の誕生—近松秋江・志賀直哉の出版期』(二〇一一)など「私小説」の概念そのものや歴史性を問い直す研究が主流となってきた。また安藤宏は『近代小説の表現機構』(二〇一一)他で「私小説」か否かを事前に峻別せずテキストそれ自体を創作

主体の表現として検討する研究を継続しており、本パネルの発表もこれら近年の傾向の延長線上に位置するものである。

おそらく、あるテキストが「私小説」であるか／ないかの分割線は、明確な実線としてではなく、段階的なグラデーションとして存在している。そして、それはこれまでの文学史が名指ししてきた「私小説」作家による「私小説」らしい作品だけを見ても明らかに不十分な。重要なのは、どのような作品が「私小説」であるかを定義することではなく、「私小説」として読まれてきた作品もそうでない作品も等しく机上に並べ、客観的にテキストに表現されたものを検証してみることである。その結果、姿を現すグラデーションの様相そのものに着目することが必要なのではないか。その考え方を具体例とともに提示することが、本パネルの目論見である。

パネル発表グループは、二〇一四年より研究会を組織してきた。その中で試みに〈私小説性〉という概念を設け、さらにテキスト内の「私小説」らしさを表す要素として〈内在的サイン〉(外在的サイン)の二種を設定し、各担当者が専門とする作家を中心に、その作

品群から網羅的にそれらサインを抽出してデータ化する作業を行ってきた。いわば集合知による「私小説」データの集積である。

二〇一五年度からは大正大学助成金「日本私小説の近現代文学史における展開の研究」、一七年度より科研費研究基盤C「〔私〕性の調査と〔自己語り〕ジャンルとの比較による日本「私小説」の総合的研究」を受けて研究を継続し、論集「私」から考える文学史―「私小説」という視座―（仮題、勉誠出版）の刊行も控えている。

これらの成果を踏まえつつ発展させ、まず代表者の梅澤が本パネルの主旨を説明した上で、志賀直哉ら白樺派と葛西善蔵ら奇蹟派における〈私小説性〉の比較検証を行い、作中人物の抽象化と連続性の問題について考察する。次に大木が理論的な側面を補足し、作家が自身をモデルに作品を描くモードが成立した一九一〇年前後の徳田秋聲と田山花袋を取り上げ、作家表象とジャンルの問題を論ずる。河野は佐藤春夫の〈失恋小説〉を同じ題材を扱った詩との比較から、その〈私小説性〉について検証する。小林は一般に「私小説」から最も遠いとみなされている新感覚派の横光

利一のテクストを軸として、戦間期文学の〈私小説性〉を論じる。尾形は戦後に自ら「私小説」理論を構築する伊藤整の一九四〇年代の文学実践を、「私小説」的方法の応用という観点から検討する。小嶋は戦後の安岡章太郎、吉行淳之介ら「第三の新人」の「私小説」と近接ジャンルであるエッセイを比較考察する。以上のパネル報告（二五分×六人×九〇分）を踏まえ、休憩（二〇分程度）をはさんで後半は討議の場とし、会場を交えた建設的な意見交換を行いたい。

第二会場（107教室）

個人発表

だれのための農民芸術論か

—— 宮沢賢治の階層と地域社会における役割 ——

牧 千 夏

本発表の課題は、宮沢賢治による農民文学・

農村実践が、①どのような立場で②誰に向けてられたものかを明らかにすることで、③同時代におけるその意義を考察することである。

宮沢の農民文学・農村実践が時代・地域の観点からあまり検討されなかったことを、研究の背景にしている。宮沢の農民文学・農村実践としては、農民・農村をモチーフとした文学作品の創作と、花巻農学校・国民高等学校・私塾である羅須地人協会で講じた農民芸術論とを取り上げた。

①では、宮沢の出身階層と学歴・職歴とを調査した結果を示す。宮沢の出身階層は、市町村内で二番手の新興商階層・大地主の下層だということ提案する。続いて、盛岡高等農林学校卒という学歴と、農学校教員という職歴から、宮沢の社会的な立場を、県レベルの指導的位置だと提案する。

②では、宮沢が花巻農学校等で農民芸術を講じる対象となった人々に焦点をあてる。彼らの出身階層・進路先を調査することで、彼らが同時代社会でどのような役割を担っていたかを調査する。彼らは主に、小地主／自作農上層という階層出身または篤農家といわれた人々であり、市町村レベルの指導的位置に

あつたと提案する。くわえて、彼らは同時代に「農村青年」と呼ばれた人々であることを示す。

③では、主に宮沢の「農民芸術概論綱要」を取り上げ、宮沢の農民文学・農村実践の同代的な意義を考察する。まずは、その対象であつた農村青年が、どのような状況下におり、どのような考えを持っていたかを明らかにする。続いて「農民芸術概論綱要」を分析し、その論が農村青年に有効であつたのかを検討する。その際、農村青年に影響を与えていた官製の農本主義と比較することで、どのような農村青年に、どう響いたのかを考えたい。

昭和初期における〈偶然〉論の展開

——ジッド文学と〈象徴〉を中心に——

姜 惠 彬

昭和初期の文壇における〈偶然〉性の問題は、横光利一の「純粹小説論」（昭和一〇年四月『改造』）と中河与一の〈偶然〉文学論

を中心に論究されることが多い。〈不確定性原理〉やベルグソンの「純粹持続」と〈偶然〉概念との間には、合理主義を支えた因果律と意志決定論的構造からの脱皮という認識論の転換がその共通項として指摘されている。やがて論点は、横光が注目したドストエフスキー文学における〈偶然〉の問題へと派生していく。当時におけるドストエフスキー文学の解釈は、ナルフ解散後〈シェストフ的不安〉に代表される、昭和期の知識人たちの精神的危機意識を含蓄するものとして理解されるのが一般的である。

この一連の過程において、〈偶然〉概念は、人間存在の〈偶然〉性という認識論の観点で集散的に論じられる一方、小説内いかに〈偶然〉を表現するかという方法論に関して、明確な方向性が提示されることがなかった。そこには、現実における〈偶然〉性と、小説内において〈必然〉的に生成されるプロットとの齟齬が深く関係している。

本発表は、かかる問題意識のもとに、〈偶然〉論の展開を小説の方法論の中で検討し、昭和初期における物語性の内実を探る試みである。注目するのは、ドストエフスキー文学に

における〈偶然〉性にいち早く着目したジッド文学との関連性で、当時、ジッドの〈偶然〉概念は〈無償の行為〉として文壇に流布していたことが確認される。ジッド文学は、純粹詩・散文詩の登場によって焦点化された〈象徴〉の問題を含蓄し、〈偶然〉概念もなお、その延長線上で理解されていたと考えられる。必然的な筋立てを避け、小説の中に〈偶然〉性を表現するという難題は、長編を模索していた作家たちの中で共有され、〈象徴〉と接点を持っていた。本発表では、横光の「純粹小説論」と同時期に書かれた川端康成の作品も視野に入れつつ、〈偶然〉概念と〈象徴〉との関連性を論じる。

共鳴する『戦争まで』

——中村光夫のフランス体験——

中 井 祐 希

一九三八年、中村光夫はフランス政府給費留学生に選ばれ渡仏する。中村は当初パリに滞在していたが、一九三九年六月からトゥー

ルの語学学校へ入学する。しかし同年八月二二日、独ソ不可侵条約締結の報を聞きヨーロッパからの引き揚げを余儀なくされる。この一連のヨーロッパ体験を描いた海外紀行文が『戦争まで』（実業之日本社、一九四二年七月）である。

本発表では『戦争まで』の内容部の分析はもちろんのこと、帰国後の中村の文学活動との影響関係も視野に入れていく。重視する点は、『戦争まで』の内容部と執筆時期との相関性である。先述した通り『戦争まで』は、第二次世界大戦勃発までのフランスでの留学体験が描かれている。しかし『戦争まで』の連載時期は、主に帰国後の一九四〇年二月から一九四一年一月までであり、連載終了の理由は、太平洋戦争勃発によりフランスについて書くことが困難になったからであった。

このような執筆状況を加味すると、『戦争まで』には二つの戦争までが刻み込まれている。一つ目は第二次世界大戦まで（書かれた内容）、二つ目は太平洋戦争まで（書かれた時期）である。言い換えると、『戦争まで』には二つの戦争までの状況が共鳴・呼応し合いながら構成されているのである。さらに興味深い

のは、単行本『戦争まで』が刊行された同月に、「近代の超克」の座談会に中村が出席している点である。そこでのレポート「近代への疑惑」（『文学界』一九四二年一〇月）で提出されている〈近代〉や〈西洋〉、〈ルネッサンス〉といった問題項は、帰国後からのライフワークであった『戦争まで』と深く関わっているだろう。

第二次世界大戦までのフランス体験が描かれた作品といった視点だけに留まらず、太平洋戦争まで、そして太平洋戦争勃発直後の日本の同時代状況も踏まえつつ、『戦争まで』の特異性と中村の思想の変遷を明らかにしていく。

パネル発表

戦後文学における〈現実〉の表象と理論

山崎 義光・加藤 達彦

尾崎名津子・塩谷 昌弘

(デイスカッサント) 鳥羽 耕史

「現実」は、actuality、realityの訳語として明治以後定着した和製漢語で、殊に自然主義以来、文学の理論化において頻用されてきた。言語論的転回からポストモダンを経てポストコロナルに至る過程で、言語と〈現実〉の関係が問われた。それは、歴史修正主義からフェイク・ニュースにまで通じる「文の抗争」（リオタール）として、現在のな問題へ通じる。そうした言語と〈現実〉表象の関係の問題を、戦後文学にたち戻って検討することには大きな意味があるだろう。

二〇世紀の世界戦争は帝国主義的な植民地再編抗争として起り、戦後は独立運動によ

る動乱の時代を迎えた。日本では占領期を経て、アメリカの傘の下での復興と繁栄を実現しつつ大衆社会化が進んだ。そうした内外の社会状況のなかで隆盛した文学ジャンルに、「事実」「真相」とかかわるルポルタージュやノンフィクションとともに、推理小説、歴史小説があった。他方、未来の可能性として寓話的な〈現実〉性にも向かいSFがジャンルとして現れた。ある事柄の表象は、利害や目的がからんだ立場や権力、地政学、制度、理論、世論の動向等、なんらかの判断基準となる認識の枠組みに依拠または対立することで〈現実〉となる。信頼しうる認識の枠組みが見えにくくなると、既存の枠組みで捉えきれない他者性を帯びた事象が「文学」においてどのように表象され批評されたか。二〇世紀後半の国際的国内的な社会状況、ジャンルの形成なども視野におきながら、坂口安吾、開高健、江藤淳の三人の文学者たちの営為を光源に討究したい。

加藤達彦は、「真相究明のナラトロジー——「安吾巷談」と「明治開化 安吾捕物」を中心に」をテーマに報告する。四六年に「墮落論」や「白痴」を発表して一躍時代の寵児

となった坂口安吾は、そのラディカルな着想で当時の社会状況や政治的動向に積極的にコミットしつつ、一方で「不連続殺人事件」（一九四七〜四八）等のエンターテインメント性に溢れる大衆小説をも執筆し、好評を博した。五〇年代に入ると、その二重性はより顕著となり、安吾自身も「流行作家」としての役割を受け入れ、半ばそのキャラクターを楽しみながら精力的に作品発表を行っていた。そうしたスタイルの端緒となったのが「安吾巷談」（一九五〇）と「明治開化 安吾捕物」（一九五〇〜五二）であろう。本報告では、ほぼ同時期に雑誌連載されたこの二つのテキストについて、安吾の蔵書調査も踏まえながら〈現実〉や〈真相〉を追究する語り（ナラトロジー）という観点を軸にメディア史を含めた相互テクスト性のなかで再考を試みたい。尾崎名津子は、「開高健のベトナム関連テクストにおける〈傍観〉の射程」をテーマに報告する。開高健は松川事件に対する「知識人」の無関心に苛立ちを覚えていた（広津和郎宛書簡、一九六四・九・二付）。そして「ずばり東京」（一九六三〜六四）の連載を終えた開高は、直ちにベトナムへ向かう。そこに

は同時代への違和感や、〈現実〉の言語化の再考への切実な欲望があったように見える。その後発表された『ベトナム戦記』（一九六五）は、吉本隆明らの批判を受けた。開高は直接的な応答をしなかったが、複数のフィクションでそれらに応えたのではないか。本報告では、とりわけ「輝ける闇」（一九六八）の分析を中心に行う。それは〈傍観〉という事態が強調される本作において言語化された〈現実〉の特質を見定めつつ、「知識人」による言説と開高テクストとの距離を測ることもなるだろう。

塩谷昌弘は、「江藤淳の〈他者〉——一九六〇年代の「文芸時評」を中心に」をテーマに報告する。七一年、江藤淳は「リアリズムの源流」を発表したが、この評論の主眼はその起源にはなく、高濱虚子の「リアリズム」の強調にあり、それは「対象」への「いたわり」や「描かぬという断念」を含むものであった。江藤の批評において一貫しているのは、江藤が認めているように、〈社会〉や〈現実〉を構成するこのような「対象」Ⅱ（他者）への意識である。本報告では、五〇年末から「リアリズムの源流」までの江藤の「文芸時評」

を検討し、江藤の〈他者〉の様態を明らかにしてみたい。ここでは江藤の主要な評論において示される〈他者〉よりも、おそらく江藤の意に反して多様な〈他者〉が見出されるはずである。そのような〈他者〉によって構成される〈現実〉がどのようなものであったのかを示してみたい。

以上の報告に対しデイスカッサントの鳥羽耕史は、戦後の「記録」と文学、安部公房など三者の報告とは異なる事例をふまえて質疑をおこなう。その後、フロアからの質疑や意見を交えた討議をおこないたい。

第三会場（106教室）

個人発表

戦後日本の占領転換期における

「混血児」表象について

——獅子文六「やっさもっさ」論——

藤 本 秀 平

『やっさもっさ』は、『毎日新聞』にて一九五二年二月十四日から八月十九日の期間に、サンフランシスコ講和条約の発効を踏ぐようにして連載された獅子文六による長編小説である。本小説は、「混血児」養護施設「双葉園」の理事、志村亮子と、その夫・四方吉、そしてプロ野球選手・太助の三者の動きに応じて場面転換が行われる群像劇として構成されている。占領下の横浜を舞台に様々な者たちが双葉園において交差する。同園へ積極的に寄付を行う米軍中尉のウォーカー。「全国産児調節普及会」宣伝部長の大西説子。「人種」という観点から「混血児」について語る新聞

記者の左右田。繁華街の「娘たちの頭目」で双葉園に息子がいるバズーカお時。物語の主役である志村夫婦は、財閥の力を借りて出世の波に乗りかけるも、結局、米兵・ドウヴァルに商談で騙され、それぞれの地位を失ってしまう。他方、太助も野球を諦め、四国への帰郷を決意する。

一見、戦後の新生活の失敗者達を描いた物語として読みうるが、その筆致は軽快で、むしろ喜劇的である。同小説はラジオでも連続放送劇として発信され、連載後の翌年は映画化され大衆から好評を博している。占領からの転換期に「混血児」の物語『やっさもっさ』はメディアを介して大衆にどのように届いたか。というよりも、社会の中で「混血児」はいかに物語化されたか。

本発表では以下に取り組む。第一に、双葉園に訪れる者達の「混血児」をめぐる語りに着目し、人種・性・資本の観点からテクストを批判的に考察する。次に、テクストと同時代の実際の社会における「混血児」言論を、新聞・雑誌・「実態調査」資料・米軍資料から追う。「混血児」の養子縁組に関わる米国の移民法にも言及する。最後に、占領転換期

という文脈を踏まえながらテクストと同時代の言論とを対位的に読み解き、戦後日本と米国による新しい政治経済的連結と「混血児」物語との関係性について明らかにする。

遠藤周作「ガリラヤの春」論

——信仰の〈進歩〉と〈調和〉——

荒瀬 康成

遠藤周作「ガリラヤの春」(「群像」昭和四四・一〇)には、昭和四四年のイスラエル取材旅行が投影されていると新全集解題は解説している。本発表では、まずこの取材旅行の足跡を辿る作業から開始する。そして作品における以下三つの表現特性を指摘し、段階的に意味付けを行う。一、「三月のエルサレム」から作品が始まる点。二、「私」と「妻」の二人旅になっている点。三、事実の旅程とは逆に「エルサレム」から「ガリラヤ」湖畔へと向った点である。次に作中人物同士が、類似(アナロジー)によって対称性を持った形で表現される物語構造を確認する。また作中

「山上の説教」とされる聖書引用が、カトリック系文語訳とプロテスタント系文語訳との混、合引用される事実を根拠にして、作品に含み込まれた宗教性や歴史性すなわち第二バチカン公会議以降に起こったエキュメニカル運動の表象であるとの問題提起を行う。そして類

比により対称性を持つ物語構造が、断絶と対立を含みながらも〈調和〉へと向かう過程を分析する。その比較資料として、作者が実際に参照していたアンドレ・パロ著「キリストの大地」(みすず書房)を用いて、現実の聖書考古学が、どのように変換され、「私」の信仰が表現されているのか考察する。結論として「母親への愛着」と繋がる「私」の信仰とは、プロテスタント神学における「信仰義認」を文学表現化したものであるが、作品上それが画一的に肯定される訳ではなく、伝統的なカトリック神学と〈調和〉されることで、カトリックとプロテスタントの「救済論の深い理解において」出合い得た場所、そんな〈神学的対話〉の始まる作品として読み換えを行う。また「日本万国博キリスト教館」の「イエス」表記問題や「沈黙」(昭和四一・三)を巡る神学者・聖書学者の言説により「ガリラヤの春」におけるエキュメニカルなキリスト教思想を裏付ける。

〈再生産〉をめぐる闘争

——花田清輝「力婦伝」論

加藤 大生

花田清輝「力婦伝」(「群像」一九七三年八月、原題「室町力婦伝」)は、花田による生前最後の小説集『室町小説集』(一九七三年一月、講談社)の第四章にあたる作品である。吉野の山奥を舞台とするこの小説では、後南朝の皇后・山邨御前や神官・小川弘光、赤松家の残党・小寺藤兵衛らを中心に、三種の神器の一つである曲玉をめぐる争奪戦の様子が描かれている。同時代評などでは、作品冒頭の水銀採掘に関する記述から公害問題への意識を読み取るものや、作中に描かれる「二つの月」のイメージに政治的批評性を見るもの、また、山邨御前の形象から天皇制批判を導き出すものなど、さまざまな観点が提出されている。

本発表では、そうした見方も踏まえつつ、この小説を特に同時代との関わりにおいて捉えることを目的とする。一九七〇年代に展開されていた新しい社会運動が提起する問題系と、このテクストは密接な関係を持つていると考えられる。たとえば、「力婦伝」は山部御前を「わわしい女」という言葉で表現しているが、これは、同時代において生起していた抵抗運動に積極的に参加する女性のありようを表象する際、用いられていた言葉でもあった。加えて、とりわけこの時期、フェミニズムによって可視化された市場の外部II（再生産）領域もまた、「力婦伝」における山部御前の身振りについて考えるうえで、欠くことのできない枠組みとして機能している。吉野の土地に根ざすかたちでおこなわれる彼女の家事労働ともいうべき営為は、資本主義的な生産の論理を問いに付すような意義をもつものとして読むことができる。

こうした視座のもと、山部御前を中心に「力婦伝」を整理していくことによって、この小説に描き出された曲玉争奪戦が寓意的に表現するところのものについても、解釈を加える。そのうえで、「力婦伝」が同時代の運動と切

り結ぶことによって示し得た抵抗の戦略とはいかなるものであったか、考察を試みたい。

パネル発表

昭和改元と女性たち

芳賀 祥子・茂木謙之介

吉田 司雄

（ディスカッサント） 武内 佳代

一九二五（大正十四）年十二月、横光利一の小説を原作とする牧野省三プロダクションの製作の映画『日輪』が不敬罪で告訴された。折しも十二月十九日、天皇が重度の脳貧血で倒れ、皇室をめぐる環境が緊迫する。翌年三月には警視庁により女相撲の興行が禁止されるなど、神事と女性との関わりはにわかにはタブー化されていたように見える。『日輪』からの連想で言えば、「元始女性は太陽であった」という『青鞥』言説は、天皇制に關する政治的言説と拮抗する境位に引き上げられ、極めて危うい状況にさらされつつあった

のかも知れない。

もちろん治安維持法が施行されたこともあり、大正から昭和への改元が現実化した言説空間で、天皇制と女権論との壮烈な対立が生起した訳ではない。しかし、女性雑誌を中心に天皇・皇后や大喪・即位に關する言説を掘り起こすならば、伝統的な皇位継承と近代的な女性表象とが初めて相克する時代の特異点を見出すこともできるはずである。

改元という特殊なタイミングを共有し儀式化することは、国民に強い、一体化をもたらした、天皇を中心とした国家意識を高めることとなる。しかしその一方で、こうした女性をめぐる二律背反的な状況は、改元をめぐる一枚岩ではない、様々な問題を含み持った表象をもたらず。本パネルでは、そうした女性と改元の表象をめぐる、芳賀祥子が文学的言説の側から、茂木謙之介が社会的言説の側から、吉田司雄が民俗学的言説の側からこの問題を照射する予定であるが、むしろこうした言説的な区分けに囚われることなく、改元を間近に控えた現代とも通底する課題を浮き彫りにしてみたい。

具体的には、芳賀が、『主婦之友』『婦人公

論「婦人之友」など複数の女性雑誌における改元の記事を分析し、各メディアにおける「改元」の位置づけを考察する。また、その際、文学者による記事や文学の引用など、「文学」が改元、女性雑誌と関わる様相も明らかにしたい。

続いて、茂木は、改元前後の女性雑誌、グラフ誌、新聞等における天皇・皇后・皇族の表象を検討する。既に一九二〇年前後に病のため政治の表舞台から退いていた嘉仁天皇に代わり、存在感を増していた貞明皇后と裕仁皇太子、そして弟宮たちの在りようは改元を境としていかなる変化を被るのか、メディア間の差異も視野に入れつつ考察する。

それらを踏まえ、吉田は折口信夫「大嘗祭の本義」などに触れながら、女帝や齋宮に関する当時の言説を組み込み、全体的な議論の整理をする。

そのうえで、武内佳代をデイスカッサントに加え、フロアとの応答を交えながら、平成最後の秋季大会で、女性と改元をめぐる問題についてさらに議論を深めたい。

第四会場（105教室）

個人発表

戯画化される〈ニーチェ〉

——通俗的イメージの形成と流布をめぐって——

清松 大

一九〇一（明治三四）年八月の『太陽』に

発表された高山樗牛「美的生活を論ず」を皮切りとして、ニーチェをめぐる論争が文壇を風靡することはよく知られている。中でも異彩を放つのは、坪内逍遙が『読売新聞』に連載した「馬骨人言」（一九〇一・二〇・二一・二二・二七）である。杉田弘子が「世にも珍しい戯作調ニーチェ論」（漱石の「猫」とニーチェ——稀代の哲学者に震撼した近代日本の知性たち）白水社、二〇一〇年）と評するこの文章において逍遙は「ニイチェ大師」「ニイチェ宗」といった言葉を用いながら、ニ

イチェや、その思想を崇拜する論者たちを、皮肉とユーモアたっぷりに攻撃していく。その後、逍遙は一九〇三（明治三六）年に刊行した『通俗倫理談』に「馬骨人言」をまとめて収録しているが、そこに付された「馬骨人言」に序す）において逍遙は執筆の動機について「当時の無責任なる文学雑誌の言論」による「年少者への悪感化」を憂えたためであると述べている。すなわち逍遙によれば、「馬骨人言」はニーチェ賛美の風潮に対する反駁であると同時に、文壇で起きている論争を受容する青年への教育的意義をも有していたのである。

本発表では、逍遙のニーチェ評や、それに反応した樗牛や登張竹風らの議論が文壇をにぎわす一方で、逍遙が作りだした戯画的なニーチェ像が、文壇の中心からは離れた場所、特に青年向けの雑誌メディアにおいて流布していく過程を跡づける。そして、そのようなイメージの流布に加担した言説が、文壇の中心で行われていた論争の展開やその性質を、どのように意識していたかを明らかにする。以上のように、論争の周縁にいた人々の営為に注目することで、美的生活論やニーチェ

をめぐる論争を新たな角度から照射することが可能となるだろう。

森鷗外「金毘羅」論

—— 神仏分離を視座として ——

岩谷泰之

森鷗外は明治四二（一九〇九）年一〇月、『スバル』第一〇号に作品「金毘羅」を発表した。主人公・小野翼は哲学者であり、香川県高松市で講演を行った際に妻が信仰する金毘羅の絵本宮である象頭山・金刀比羅宮の近くに立ち寄るが参詣せずに東京へと帰る。偶然にも同じ日に息子が百日咳にかかり、妻は金毘羅の護符を布団に縫い付け看病するが息子は死に、娘までもが同じ病で死にかける。妻は自分の見た夢が正夢となったことで金毘羅への信仰をより篤いものとし、語り手の「哲学者たる小野博士までが金毘羅様の信者にならねば好い」という一文で作品は終わる。

このような作品に対し先行研究では主に、近代的合理性の中における非合理性という観点

から金毘羅信仰が論じられてきた。

しかし鷗外は作中の登場人物に金毘羅とは「本当は何を祀つたものでございませう」と言わせている。このような疑問は、実際に作品発表当時の世の中で取り扱われた問題でもあった。そして仏教学者の高楠順次郎等によつて、金毘羅は神道におけるものなのか仏教におけるものなのかという調査が行われた。その高楠の名は作中でも触れられているため、作品執筆にあたり鷗外はこの問題を意識していたと考えられる。また当時の金刀比羅宮は寺院から訴訟を起こされていた。これらの問題は、明治初期の神仏分離令によつて神仏習合が解かれたことにより、金刀比羅宮が神社として独立したことに起因する。これまでの先行研究ではこうした問題が追求されてこなかった。本発表では作品発表当時の金毘羅にまつわる問題に焦点を当てることで、鷗外が政府による神仏分離をどのように捉えていたのかということを考察したい。

中里介山『大菩薩峠』の語りと文体

—— 小説へのデイスタンス

紅野謙介

中里介山の『大菩薩峠』は連載開始から二八年に及んで書かれ、著者の死とともに未完に終わった。そのように言われている。事実としてはその通りなのだが、果たしてこの小説は終わりをほんとうに目指していたのだろうか。

この間、野口良平、成田龍一、伊東祐吏などによる『大菩薩峠』論がまとめられ、単行本として刊行されてきた。こうした関心は依然として『大菩薩峠』がまだ文学テクストとして生きて示しているが、ともすればこの長すぎる小説を有機的な一貫性をもったものとして解釈しようとする、あるいは反対に一貫性がないと批判する、そのどちらも連続性をもった「作品」としての理解を前提にしている点で共通しているように思う。なかでも論創社から『都新聞』の初出版

『大菩薩峠』を編んだ伊東祐吏氏によって、単行本版は初出の荒いダイジェストに過ぎず、初出の方がはるかに優れているという批判がなされた。両者のあいだには語りの方法の変化もあり、つぶさに見ていけばそのような指摘は当たらない。

ただ、この小説の場合、その長い執筆過程で文体にも変化があり、統一的に捉えることの難しさもある。変化や非連続性をむしろ前面において再解釈するとうなるのか。小説を小説形式への適応と、小説形式からの逸脱の矛盾した錯綜体としてとらえてみたいというのが発表者の狙いである。そうした小説が小説のひとつの典型として評価され、ときに小説形式をめぐる論争をも誘発してしまう。こうした事態をどのように捉えればいいのか。また、終わりを繰り返していくようなその文体が意味しているものは何か。近代文学の歴史を相対化するこの孤絶した長編の歴史的な意義を考えてみたい。

若年層向けエンターテインメント小説がもたらした「読書」のかたち
——一九八〇年代の富士見書房周辺から

山中智省

本発表では、現代の若年層が行っていると考えられる活字とビジュアル要素（例えばマンガ・アニメ・ゲームの世界観や登場人物を想起させるイラストなど）、あるいは、他／多メディアで展開されたメディア化作品との繋がりを踏まえた小説の読書について、その有力な源流の一つだったとみられる、一九八〇年代の若年層向けエンターテインメント小説をめぐる動向に着目する。そして同時代の雑誌や作品の分析を手がかりとして、現代的な読書様態の「端緒」を明らかにすることを試みる。

現代における若年層の読書は、活字とビジュアル要素、他／多メディアとの関係性のなかで行われているとされ、同様の傾向は「学校読書調査」等の各種読書調査でも指摘が見受けられる。また、こうした読書のかたちが

成立した背景については、既に文学研究でも言及されている通り、マンガ、アニメ、ゲームといったサブカルチャーの台頭、複数メディアを横断して作品を拡大再生産するメディアミックスの常態化、さらには、これらの文化現象にふれて育ってきた世代が、新たに小説の受容と供給を担うようになったことがあるとされている。本発表は以上のような読書の成立過程とその内実に向けるため、現在は「ライトノベル」と呼ばれている若年層向けエンターテインメント小説のなかでも、一九八〇年代後半に富士見書房の周辺から現れてきた作品群に焦点を当てる。なお、発表者のこれまでの調査により、若年層の「活字離れ」が叫ばれるなか、同社が一九八八年に創刊した雑誌『ドラゴンマガジン』や富士見ファンタジア文庫では、活字とビジュアル要素の意識的なコラボレーションにより、読者を小説へと誘う取り組みが行われていたことが判明している。

ゆえに本発表では、『ドラゴンマガジン』や富士見ファンタジア文庫に見られた実作品の分析を通して、当時の若年層に向けて提示されていた、現在の読書にも繋がり得る「小説の読み方」を探っていく。